
COMBAT ! ?

.png

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

COMBAT!?

【コード】

N7640J

【作者名】

.png

【あらすじ】

僕のホームページ、独自形式・xyz-の方にアップしてありますSF作品、『COMBAT!』の書き直し作品です。一応読む前にそちらを読んでいただければと思います。

(前書き)

あらすじにもありましたとおり独自形式 - x y z - の方のCOMB
AT!を読んでいただきたいと思います。

眼下を流れる漆黒の海、そして遠くに見える蒼い球状。

「BF-24、帰艦します」

『こちら管制室、了解しました。三番デッキへどうぞ』

「了解、着艦まであと2100ヤード」

『三番デッキ着艦準備完了、以上です』

銀の機体は後ろに銀の線をたなびかせながら高速で漆黒の海を進んでいく。

目を下に落とすと流れていく白い星々が見える。その中で銀の機体は残り1500ヤードを高速で進んでいった。

…

ガシャン、という機体の固定される音を聞いてからキャノピーを空ける。すると目の前に広がるのは数々の機体達。

その中でも一番目を引くのは僕の機体なのかな……。なんせ僕の機体は本体から翼まで銀色に塗りつぶされていて所々に黒いラインが入れているという色だからだ。

まあ別にそんな色は嫌いじゃないのでそれはいいとして寄ってきた人の相手をするにすることにする。

「あ、大尉」

「どうしたリイ」

「いや、ちょっとペダルをいじってみたからどうだったかなって」「お前が犯人か……。急に軽くなっていて吃驚したぞ」

危うく目の前にあった壊された機体の残骸にぶつかるどころだったんだぞ。

「すみません、直しておきますね〜」
そう言つて銀色の機体へと、とてとて走っていくリイは僕の機体の専属整備士だ。そんな彼女はたまに無断で変なところを弄つてはそれを告げないので僕は酷い目にあつていたりする。
さて、自室に戻るか。

何故僕達が今地球周回軌道上という人間としては普段いないところにいるかという戦争である。所謂第三次世界大戦、人類が宇宙に出てからその宇宙資源の分配を巡つて起きた戦争である。

しかしこの戦争ではいくつかの規定があつたりする。

まず、非戦闘員は巻き込みではいけないという規定。これは開戦から一年ほど経つたときにできた規定ですぐさま全勢力に通達された。そして惑星内での核使用禁止だ。理由は放射能汚染を恐れていることで宙域内ならばいくら使つてもいいらしい。

他にも沢山あるのだがそのほとんどが無視されて状況にある。

それで今、僕やリイたちが所属しているのは反地球勢力組織ターンアースだ。

この戦争に参加しているのは地球軍、月勢力、火星軍の三つだ。その中でも地球軍は開戦一年までは無条件で敵地は攻撃しておりそれによつてできたリイたちのような難民と僕達のような一部の軍人が集まつてできたのがこの組織である。

しかし他のに勢力とも手は組んでおらずその情勢から遊撃組織や宇宙海賊などとも呼ばれてる。たまに影で手を組んで傭兵紛いの事もしているのだがそれは置いておこうか。

それがこの組織、ターンアースだ。

「今日のデータはつと・・・」

今、解析を始めたのは今日の航続データ。

「最初のはリーの所為だから無視していいとして、ここがどうも駄目だな」

気になったのは一箇所、まだ新型機だから体に馴染んでいないのかどうも動きが悪い。

P L L L L L L L L L . . .

内線電話か？

「はい、152号室です」

『ああ、大尉か。ブリッチまで来てくれないか？』

「ええ、分かりました」

『分かった。じゃあ来てくれ』

回線を切る。・・・さて、行くか。

...

「で、新型の性能はどうだったかね？」

今、目の前にいるのはこの艦の艦長、コウ艦長だ。

「すこし加速度が高かった気もしますがそこは言うっておきました。それと機銃弾大きくなりました？」

加速度の問題の犯人は分かっているが。

「ああ、分かったかね」

「ええ、反動が大きくなってどうも撃ちにくいんですよ。元のサイ

ズにしてもらえますか？」
弾が大きくなると反動が大きくなる。何故か詳しく知らないが、な
つてしまうのだからしょうがない。
「無理だな。もう組織の規格であれになってしまったらしい」
「そうですか・・・じゃあブースター替えてもらえますか？」
「ああ、そうしておこうか」
交渉は成功。これで用事は終わりか？
「それじゃ、失礼します」
「ああ、待機しておいてくれ」

…

「待機、つて言われても困るよな・・・」
待機、困る言葉である。機会を待つ、でもやる事が無いのが実情で
ある。

「しょうがない、本でも　「大尉、遊びに来ましたよっ！」
・・・うるさいのが来た、そう思う。
「なんだリイ？」
「だ・か・ら、遊びに来たんですよっ！どうせ暇だったでしょう？」
「・・・」

確かに暇ではあった。

「あ、図星ですねー。それじゃ、何しましょうか？」
「いや、帰ってもらえると嬉しい」
「ひ、酷いですよー！」

おやおよと泣き真似をするリイ。

「はいはい、酷い人の部屋からは出て行ったほうがいいと思つよ」
「ええっ、そんな!？」

追い返そうとするとベットの端をきつく掴んで話さないリイ。まっ

たく嫌になる。

「じゃあ、何やる？」

「え、いいの!？」

この自分の甘さにだ。

…

緊急警報、緊急警報。前方二時の方向約3000ヤードに地球軍艦隊を発見。戦闘員は準備されたし。繰り返す…

そんな警報が鳴ったのは遊び始めて30分ほど立ったときだった。

「むう、厄介な警報ですね…まだ一度もチェックメイトしてないのに…」

「でも、僕は数回してるからな」

「大尉はチェス強すぎなんです!」

お前が弱い、そうは言わないことにしよう。

「それじゃあ、静かにしているよ」

「言われなくてもチェックメイトするまでここに居座りますよ」

「そうか、じゃあ部屋を変えるか？」

「むう…暗に勝てないって言ってるんですか？」

「さあな。それじゃあ行ってくる」

さて、さっさと戦闘を済ませてきて戻ってくるか。

きつとリィはここで待っているのだから。

(後書き)

あーあ、戦闘シーンが見事になくなったよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7640j/>

COMBAT! ?

2011年1月27日06時15分発行